論　文

英語基準学生の日本語学習動機に関する一考察
－CRPS（Community and Regional Policy Studies）専攻学生に対する質問紙調査より－

藤原智栄美・大平　幸・野々口ちとせ

An Examination of English-based Degree Program Students' Motivations to Learn Japanese: A Questionnaire Survey of CRPS Students

Chiemi FUJIWARA, Saki OHIRA, Chitose NONOGUCHI

Abstract

The objective of this study is to elucidate the motivations among foreign students of the English-based degree program to learn the Japanese language. A 45-item questionnaire survey on motivations to learn Japanese was conducted targeting 1st to 5th-year foreign students majoring in Community and Regional Policy Studies（CRPS students）at the College of Policy Science. The survey results showed higher scores among motivation items, which indicated CRPS students' orientation toward mutual exchanges, understanding of Japanese culture/society, and future career. Lower scores on motivation items were related to a sense of duty such as "taking a course in order to graduate." Regarding a correlation analysis between learning motivation items related to future career and those related to other factors, the item "in order to find employment in Japan" showed strong correlations with integrative motivations, whereas the item "in order to find employment in the home country that requires Japanese skills" indicated significant correlations with other instrumental motivation factors. Additionally, motivation items related to improving "reading/writing" skills tended to have relatively higher scores. As for academic writing or acquisition of advanced Japanese language skills, strong correlations were found with spontaneous motivations to find joy in the learning of Japanese itself, as well as with motivations related to future residence and employment in Japan.

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

現在、日本の高等教育機関において日本語を学習する留学生数は58,418名で[1]、大学のグローバル化により、今後もさらに増加していくことが予想される。また、文部科学省では、大学の国際化を実現した上で「ポスト留学生30万人計画」として、留学生の日本での就職促進に関する政策が検討されている（文部科学省 2018）。そのような状況を背景に留学生の入学後の学習環境や日本語に関する学習ニーズが多様化する流れの中、大学においては、日本語学習者のタイプに応じた、充実した日本語プログラムの提供が求められる。

立命館大学では、2011年4月に国際関係学部においてGlobal Studies専攻、2013年9月に政策科学部にCommunity and Regional Policy Studies（以下、CRPS）専攻[2]が開設されたことにより、新しいタイプの日本語学習者ともいえる「英語基準学生」[3]が増加傾向にある。英語基準学生は、英語を媒介として専門科目を学び卒業していくが、政策科学部においては、日本での生活に必

要な日本語の学習を望む学生が多く、ほぼ全ての学生が入学後に日本語科目を履修している。今後、英語基準学生に対する日本語カリキュラムをより充実したものとしていくためには、それらの学生たちが日本語に対していかなる学習動機を持っているのかを把握することが重要である。

学習動機は、第二言語習得研究において、学習者の学習そのものの成否や継続に影響を与える重要な要因であり、数多くの研究が積み重ねられてきた。日本語学習者の動機づけに関する研究においては、学習者がいかなる環境で学ぶかによりその特徴が異なることが指摘されている（郭･大北 2001、大西 2010 等）。しかしながら、英語基準学生の日本語学習に対する動機づけに関する研究はこれまでほとんどなされておらず、英語基準学生の日本語カリキュラムの策定及び改善に向けての材料も多くない。そこで本稿では、立命館大学政策科学部に在籍する英語基準学生（以下、CRPS 生とする）を対象に質問紙調査を実施することで、英語基準学生の日本語学習に対する動機づけの傾向性を明らかにすることを目的とする。

1.2. CRPS 生に対する日本語教育の現況及び入学時の日本語レベル

CRPS 生の学習動機を具体的に見ていく前に、まず、分析の背景となる彼らの日本語学習環境について触れておきたい。CRPS 生の日本語科目の必修単位は 12 単位[4]で、母語話者レベルを除く学生は入学後の 1 学期目より日本語科目を受講する。表 1 は、CRPS 生に対する日本語カリキュラムを示している。

入学時（9 月）のプレースメントテストによりクラス分けがなされ、レベルに応じて初級から超級までのクラスを履修する。表 2 を見てわかるように、約 7 割の学生は入学時に初級レベルから日本語学習を開始している。

表 2　入学時点での CRPS 生の日本語レベル

	2013	2014	2015	2016	2017	2018	計
初級レベル[6]	5	9	13	16	23	20	86(69.4%)
中級レベル	3	2	7	3	1	3	19(15.3%)
上級レベル	2	1	0	4	1	0	8（6.5%）
超級レベル	1	0	1	2	1	1	6（4.8%）
母語話者レベル	1	0	1	1	0	2	5（4.0%）
計	12	12	22	26	26	26	124

入学時の日本語レベルとして最も多い初級前半レベルから日本語学習を開始した CRPS 生は、最初の 1 年間（初級後半から始めた学生は 1 年半）日本語科目を履修することで、卒業に必要な外国語科目単位数を取り終える形となる。しかし、必修の 12 単位を取得した後も日本語科目受講を継続する学生が一定数[7]存在している。

2. 第二言語学習の動機づけに関する先行研究

2.1. 第二言語学習の動機づけ研究の流れ

第二言語学習者が持つ動機づけは、言語習得に影響を与える個人的な要因として、多くの研究者及び言語教師の関心を集めてきた。言語教育における動機づけ研究は、1950 年代後半よりカナダにおけるバイリンガル環

表 1　CRPS 生が受講する日本語科目一覧[5]

※( ) の数字は週におけるコマ数　＊は学部独自開講科目（Ⅰは秋学期、Ⅱは春学期開講、各 2 単位）

初級	日本語初級 1	総合（3）、読解・ライティング（2）、聴解口頭（1）	計 6 単位
	日本語初級 2	総合（3）、読解・ライティング（2）、聴解口頭（1）	計 6 単位
中級	日本語中級 1	総合（3）、聴解口頭（1）	計 4 単位
	日本語中級 2	総合（3）、聴解口頭（1）	計 4 単位
	Special Japanese Lecture（Topics on Japan）＊Ⅰ、Ⅱ		
上級	日本語上級	文法・ライティング（1）、聴解口頭（1）	計 2 単位
	Special Japanese Lecture（Aspects of Japanese Society）＊Ⅰ、Ⅱ Special Japanese Lecture（Japanese for Policy Science）＊Ⅰ、Ⅱ		
超級	文章表現（1）、読解（1）、聴解口頭（1）		
	キャリア日本語（1）、アカデミック日本語（1）		
	Japanese Reading for Policy Science＊Ⅰ、Ⅱ		

境において社会心理学的アプローチから考察を行った Gardner and Lambert（1959）がある。Gardner らの研究は、動機づけの分類として、学習者が目標言語話者の言語共同体社会に近づくことを望む「統合的動機づけ」（integrative motive）と、ある目的を達成する手段として言語学習を行う「道具的動機づけ」（instrumental motive）を提示し、言語学習者の情意的側面に焦点を当てた先駆的研究であったといえる。その後の流れとして、言語学習者を取り巻く環境が動機づけに影響を与えるという観点のみで動機づけを捉えることはできないという問題意識より、学習者が学ぶ教室や授業実践が動機づけに影響を与える要因として焦点が当たった（Deci & Ryan1985, Ryan & Deci 2000a, 2000b）。また、動機づけがいかに変容していくのかという時間軸で学習者の動機づけを動的に捉えようとする理論的枠組みが提示され、質的研究も行われている（Ushioda 1998）。Dörnyei（2005, 2009）の提唱する L2 動機づけ自己システムによると、将来の L2 自己像（なれる自分）は、L2 理想自己（なりたい自分）と L2 義務自己（なるべき自分）、L2 学習経験の 3 者で形成され、3 者のありようで将来の L2 自己像は変容するという。言い換えれば、授業を中心とした L2 学習経験が、将来の L2 自己像の形成に大きく影響すると同時に、学習者が L2 理想自己と L2 義務自己を明確に認識できれば動機づけが高まり、特に高等教育段階では L2 理想自己を具体的にイメージできるほど、主体的に学習を進めると考えられている（大和・三上 2012）。

2.2. 日本語学習者の動機づけに関する研究

日本語学習者の動機づけに関しても海外・国内で、多くの研究が積み重ねられている。縫部他（1995）では、ニュージーランドの大学生の日本語学習動機に関する調査が行われ、「統合的動機」は来日経験がある方が高く、「道具的動機」は学習期間が長い方が高いとするとともに、「いい成績を取りたい」、「周囲の人に言われて勉強を始めた」等、日本語学習自体が目的となっていない「誘発的動機」（incentive motive）を提示した。シンガポール華人大学生の日本語学習動機を考察した郭・大北（2001）は、Gardner and Lambert（1972）、縫部他（1995）を基に調査を行ったが、シンガポールの社会文化状況により、先行研究とは異なる動機づけが学習成果に影響を及ぼしているとの結果が導かれており、日本語学習の動機づけの多様性の究明のためには、今後、学習環境が異なる様々な地域での調査が必要であると述べている。

また、日本語学習者を対象とした他の研究においては、日本留学により日本語学習動機が強化される（高岸 2000）、日本語学習の継続性は動機づけから影響を受ける（楊 2011）等の知見が提示されている。しかし、国内では短期留学生を研究対象としたものが多く、前述したように、英語基準学生の動機づけに対する実証はほとんどなされていない。

3. 調査

3.1. 調査概要及び調査対象者

英語基準学生の日本語学習に対する動機づけの傾向性を明らかにするため、2016 年 12 月から 2018 年 1 月にかけて、立命館大学政策科学部に在籍する Community and Regional Policy Studies 専攻の英語基準学生（第 1 期生～第 5 期生）に対し、日本語学習動機に関する質問紙調査を実施した。質問項目は、日本語教育分野における動機づけの先行研究（縫部他 1995、郭・大北 2001、小林 2008 他）を基に、立命館大学の英語基準学生の現状に合わせて項目を追加、削除を行い作成した（巻末資料を参照のこと）。質問紙は英語で作成し、調査協力者への質問紙の受け渡しが難しい場合は、web 版への回答を依頼した。

記入においては 45 項目から成る日本語学習動機に関し、「強く同意する」・「同意する」・「どちらとも言えない」・「反対する」・「強く反対する」という 5 件法で、回答してもらった。また、それに加え、調査対象者の社会的属性及び日本語学習に関わる情報（学年、日本語学習歴、日本語能力試験合格の有無、習得目標とする日本語レベル、日常生活における日本語使用状況）を尋ねた。

調査の実施により、CRPS 生 85 名より回答が得られた（回収率 87.6%）。回答者の母語の内訳は、中国語 43 名、韓国語 12 名、ヒンディー語 9 名、インドネシア語 5 名、英語 5 名、タイ語各 3 名、スウェーデン語、アラビア語、ウルドゥー語、ベトナム語、モンゴル語、台湾語が各 1 名、不明 2 名である。学年は、1 年生が 44 名（51.8%）、2 年生 21 名（24.7%）、3 年生 10 名（11.8%）、4 年生 8 名（9.4%）、不明 2 名（2.4%）である。調査対象者の日本語レベルの割合は、初級 59 名（69.4%）、中級 16 名（18.8%）、上級 2 名（2.4%）、超級 1 名（1.2%）、不明 7

名（8.2%）となっている。

3.2. 分析プロセス及び観点

次に本稿の分析プロセス及び観点について述べたい。英語コースで学位を取得するCRPS生が必修単位を満たした後も、なお日本語クラスを受講する学生がかなりの割合で存在するのはなぜか。そこには、いかなる日本語学習動機が存在するのだろうか。それらの問いが本稿の出発点である。CRPS生の日本語学習動機の特徴を明らかにするための分析プロセスとして、第一に、学習動機の高かった項目、低かった項目を提示し、CRPS生の動機づけの特徴について考察する。そこに現れた項目には、CRPS生が日本語学習に対していかなる志向性を持つのかが示されるといえる。第二に、高等教育における日本語教育の重要な観点の一つである「キャリア」・「読み書き能力」という二つの観点から、CRPS生の動機づけを考察する。これらの観点を取り上げる理由は、以下の問題意識に基づくものである。まず、留学生の「キャリア」については、本稿の冒頭で述べたように、留学生の日本での就職という社会的ニーズの強まりを受け国による留学生政策の重点項目の一つとなっており、大学においても留学生支援のキーワードの一つとして位置づけられる。日本語教育分野においては日本語学習者向けのビジネス日本語の教材の開発がなされ、また、留学生のキャリア意識に関する研究（堀井 2010、福岡 2015、寅丸他 2018 等）も行われている。しかし、留学生を対象とした調査において、英語基準学生に特化して言及したものはなく、英語基準学生のキャリアに関わる日本語学習動機がどのような傾向を有するのかは明らかになっていない。本稿で調査対象とするCRPS生はいかに自身の「キャリア」と結び付けて日本語学習に向かっているのだろうか。また、日本語でのコミュニケーション能力の向上が日本語の教育目標の大きな柱であることは疑う余地がないが、英語で専門科目の学位取得を目指す英語基準学生にとって、日本語でのアカデミックな学術活動の基礎となり得る日本語の「読み書き能力」の向上はどの程度必要であるのか。これら二つの観点から日本語学習動機を探ることは、英語基準学生に対する日本語カリキュラムを考慮・改善していく上で重要であろう。次節より、上記の分析プロセスに沿って調査結果を示しながら、英語基準学生の日本語学習動機の特徴について探っていく。

4. 調査結果

本節では、CRPS生の日本語学習の動機づけに関する調査結果を順にみていくが、まず、4.1で日本語学習動機に関連する2つの調査項目（「日本語学習において卒業前に到達したい日本語レベル」、「日常生活で、どのくらい日本語母語話者と話す機会があるか」）の回答結果を提示した後、4.2より、日本語学習動機について分析を行っていく。4.2では、CRPS生の日本語学習動機の上位項目・下位項目から見たその特徴を明らかにし、4.3で「キャリア」に関する学習動機、4.4で「読み書き能力」に関する学習動機の分析結果について論じる。

4.1. 日本語学習動機の背景情報となる調査項目：到達したい日本語レベル及び日本人との接触

本調査においては、日本語学習動機に関連する問いとして、「卒業するまでにいずれの日本語レベルに到達したいか」について尋ねた。その結果、85名中「初級レベル」と回答したのは3名で、また、「中級レベル」についても同数の3名となり、いずれも非常に少ない割合であった。最も多かったのは「上級レベル」で、全体の54.1%（46名）を占めていた。「母語話者レベル」と回答した調査対象者は38.8%（33名）にのぼり、調査対象者の目指す日本語習得レベルは高い傾向にあることが明らかとなった。

次に、日常生活の日本人とのコミュニケーション頻度を問う「普段どのくらい日本人と話す機会があるか」という設問に対しては、「全くない」が3.5%（3名）、「時々ある」が70.6%（60名）、「非常に頻繁にある」が24.7%（21名）、無回答が1名だった。また、「時々ある」「非常にある」と回答した人に対し、「誰と」「どのような場面」で日本語を使っているか（複数回答可）を自由記述形式で回答してもらったところ、「誰と話すか」において最も多かったのは、「友人・クラスメート」（24名）で、「隣人」・「ホストファミリー」等、大学以外で会う人々を挙げた人が7名であった。また、日本語を話す場面として挙げた回答の中で、「買い物」・「レストラン」等の商業施設（32名）が最も多く、次に、「大学」（20名）、「アルバイト」（19名）、「銀行」・「郵便局」等の金融・公的機関（6名）と続いた。

4.2. CRPS 生の日本語学習動機の上位及び下位項目

表 3 は、調査項目である日本語学習に関する動機づけ 45 項目に関し、平均得点が高かった上位 10 項目[8] を示したものである。

表 3　調査対象者の平均得点（上位 10 項目）

	調査項目	*MEAN*	*SD*
1	04. 日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから	4.69	.512
	25. 日本語学習は日本での旅行に役立つから	4.69	.535
3	05. 日本人と友達になりたいから	4.64	.595
4	26. 将来のキャリアに役立つから	4.55	.732
5	41. アルバイトに役立つから	4.50	.685
6	24. 日本語科目でいい成績が取りたいから	4.49	.648
7	15. 日本語で書かれた文献を読みたいから	4.46	.609
8	27. 日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから	4.45	.838
9	34. 新しい人に会って友達になりたいから	4.44	.663
10	19. 日本の雑誌、新聞記事を読みたいから	4.40	.694

上位 10 項目は平均得点がすべて 4.4 以上である。「日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから」「日本人と友達になりたいから」「新しい人に会って友達になりたいから」の 3 項目は交流志向の動機づけとしてまとめることができ、人間関係構築が日本語学習の高い動機づけになっている。また、「日本語学習は、日本での旅行に役立つから」「日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから」「日本の雑誌、新聞記事を読みたいから」の 3 項目からは、日本文化・社会の理解という共通項が抽出できるだろう。「将来のキャリアに役立つから」は将来の仕事・職歴に関わる動機づけである。「アルバイトに役立つから」は日常生活に結びつく道具的な動機づけといえよう。

「日本語で書かれた文献を読みたいから」という項目も得点が高く、日本語で書かれた記事・論文を通した専門分野の学習に対する意欲もうかがえる。「日本語科目でいい成績が取りたいから」の得点も高いが、これは履修した日本語科目で単によい成績をとりたいと希望しているのか、GPA を高くする手段として日本語学習を位置づけているのか、どちらなのかは判然としない。

続いて、表 4 に日本語学習に関する動機づけ 45 項目に関し、平均得点が低かった下位 10 項目を示す。

表 4　調査対象者の平均得点（下位 10 項目）

	調査項目	*MEAN*	*SD*
1	30. 中学や高校で日本語を勉強したから	2.08	1.391
2	31. 特に目的はないが、大学の科目にあったから	2.32	1.153
3	12. 日本のゲームをするのが好きだから	2.93	1.518
4	42. 起業して日本と貿易したいから	3.14	1.274
5	29. 日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから	3.28	1.130
6	09. 日本語を学びたくはないが重要だとわかるから	3.36	1.299
7	14. 卒業するために履修しなければいけないから	3.49	1.259
	40. 自国で日本語が人気があるから	3.49	1.119
9	32. 両親が学習を勧めたから	3.55	1.129
	39. 日本の歴史に興味があるから	3.55	1.075

下から 4 位以下の項目は平均得点が 3 以上で、他の項目と比べると低いが、絶対的に低い得点とはいえず、全体的に動機づけが高い傾向を表している。「中学や高校で日本語を勉強したから」が最も低いのは、1.2 節の注 6 に示したように、大学入学前の日本語学習歴がない者がかなり多いためであろう。次に平均得点が低いのは「特に目的はないが、大学の科目にあったから」で、「日本語を学びたくはないが重要だとわかるから」や「卒業するために履修しなければならないから」という項目も相対的に得点が高くないことから、義務的な動機づけは比較的低いことがわかる。また、「日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから」「自国で日本語が人気があるから」「両親が学習を勧めたから」といった外発的な動機づけも他項目と比べると低い。

ゲームは J-Pop やアニメと並んで現代日本文化を代表するものだが、「日本のゲームをするのが好きだから」の得点は 2.93 と高くはなく、標準偏差が 1.5 以上でややばらつきがあることから、他項目より個人差のある動機

づけといえよう。

以上をまとめると、上位項目からは、交流志向、日本文化・社会理解志向、キャリア志向の動機づけが比較的高い傾向が、下位項目からは義務的・誘発的動機づけは相対的に低い傾向が読み取れる。

4.3. キャリアと日本語学習動機

日本の大学・大学院で学ぶ留学生の日本語学習動機を捉えた小林（2008）では、日本語学習動機を構成する5つの因子に、「日系企業への就職や貿易会社の起業」というキャリアを見据えた動機づけが含まれていることを明らかにしている。小林は、学習動機構造における「道具的志向」に含まれる3つの項目として、「母国の日本企業に就職したいから」、「日本で就職したいから」、「自分の会社を作って日本と貿易したいから」を挙げている。では、CRPS生は、「キャリア」に関わる日本語学習の動機づけに対し、いかなる特徴を示しただろうか。図1は、それらの結果を示している。

まず、「将来のキャリアに役立つから」日本語を学ぶと考えていると回答した人は、「強く同意する」が58%、「同意する」が17%で高い割合を示しており、調査対象者の4人に3人は将来自身が就く職業・経歴と日本語習得を結び付けて学習に取り組んでいることがわかる。次に、「将来日本で働きたいから」を見ると、「強く同意する」「同意する」を合わせた数値が52%となり、約半数が「日本での就職」を考慮しつつ日本語を学んでいることが明らかとなった。「自国で日本語を使って働きたいから」については68%と、さらに割合が高くなり、将来的には自国で仕事を行う際に日本語使用を活かすことを考えている学生が多いことがうかがえる。「起業して日本と貿易したいから」は7割の学生が同意しなかったが、「起業」の可能性を考えながら日本語学習に取り組む学生が一定数存在することが確認された。

日本在住の留学生にとって、将来、日本に残って働くか、自国に戻って働くかは、今後のキャリア、そして自身の人生に関わる重要な選択である。ここでは「日本で働きたいから」、「自国で日本語を使って働きたいから」という二項目間での相関分析を行い、これら二つの学習動機に関わる特徴を「共通性」・「個別性」という観点から示したい。まず共通点を見てみよう。表5からわかるように、二項目両方との相関が見られた日本語学習動機は、他の43の学習動機項目のうち、「将来日本に住みたいから」「将来も日本で勉強を続けたいから」「将来のキャリアに役立つから」「日本語を知っていることで他者から尊敬され得るから」の4項目であった。日本・自国のいずれにおいてにせよ、将来的に仕事で日本語を使って働きたいという日本語学習動機は、他の将来的な展望（日本での居住意思・経歴・勉学の継続）に関わる学習動機と繋がっており、また、他者からの尊敬を得るという「日本語習得による自己イメージの向上」とも関連していることが表れているといえる。

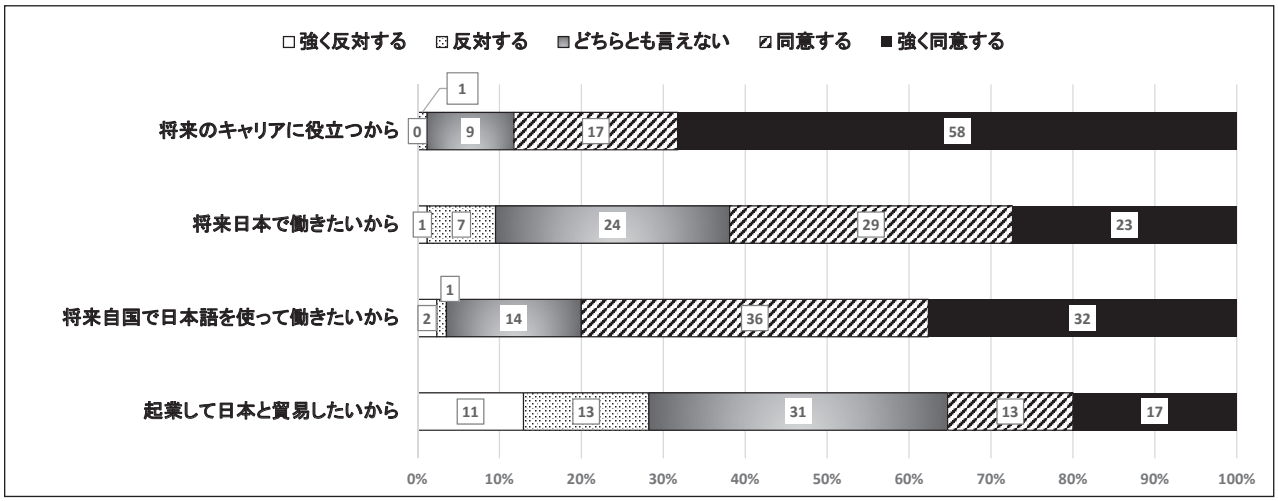

図1 「キャリア」に関わる日本語の学習動機

表５　「将来日本で働きたいから」（A）、「将来自国で日本語を使って働きたいから」（B）に関する他の日本語学習動機項目との相関分析結果（共通性）
（r ＝相関係数、p<.01）

将来の就職	A、B に共通して相関の見られた項目	相関係数及び相関の度合	キーワード
A.　日本	将来日本に住みたいから	r=.851（高）	**将来の日本居住意思**
B.　自国		r=.393（低）	
A.　日本	将来も日本で勉強を続けたいから	r=.495（中）	**将来の日本での勉強継続**
B.　自国		r=.432（中）	
A.　日本	将来のキャリアに役立つから	r=.416（中）	**将来のキャリア**
B.　自国		r=.391（低）	
A.　日本	日本語を知っていることで他者から尊敬され得るから	r=.347（低）	**他者からの尊敬**
B.　自国		r=.325（低）	

表６　「将来日本で働きたいから」（A）・「将来自国で日本語を使って働きたいから」（B）と他の項目との相関分析結果（個別性）
（r ＝相関係数、p<.01）

「将来日本で働きたいから」のみに相関が認められた項目	相関係数及び度合	キーワード
・日本の歴史に興味があるから ・日本語の歌を聴いたり歌ったりして楽しみたいから ・伝統的な日本の文化に興味があるから	r=.418（中） r=.389（低） r=.335（低）	**日本文化理解及び関心**
・漢字の理解を深めたいから ・日本語でレポート・論文を書きたいから	r=.405（中） r=.357（低）	**日本語習得への向上心**
「将来自国で日本語を使って働きたいから」のみに相関が認められた項目		
・起業して日本と貿易したいから	r=.331（低）	**起業**
・日本語学習は日本での旅行に役立つから	r=.326（低）	**旅行**
・日本語科目でいい成績が取りたいから	r=.295（低）	**成績向上**

続いて、二項目それぞれの個別性を見てみよう。まず、「将来日本で働きたいから」という日本語学習動機のみに見られ、「将来自国で日本語を使って働きたいから」との相関がなかった学習動機は以下の５項目である。これらは、表６のキーワードに示したように、「歴史」「歌」「伝統文化」に対する興味・関心でまとめられる「日本文化理解及び関心」に関わる学習動機、そして「漢字の理解」・「レポート・論文」を書きたいといった「日本語習得への向上心」に大別できる。「将来日本で働きたいから」に現れた個別性は、日本語そのもの及び日本文化に関心が向いている学習動機と関連があるといえよう。

一方、「自国で日本語を使って働きたいから」という学習動機のみと相関が見られたのは、「起業」・「旅行」・「成績向上」の３項目であった。先ほど述べた「日本で働きたいから」に現れた項目とはその性質が異なっている。これらは「日本語によって」何かを行う、つまり、ある目的を達成する上での手段として日本語を捉えている学習動機との関連がより強い傾向にあるといえるのではないだろうか。

4.4.　「読み書き」に対する学習動機

本節では、CRPS 生の「読み書き」に対する学習動機について分析する。図２、図３は「読み」に対する学習動機を示している。図２の「日本の雑誌・新聞記事を読みたいから」、図３の「日本語で書かれた文献を読みたいから」においては、いずれも、調査対象者の約半数が「強く同意する」と答え、４割の「同意する」を合わせると９割以上にのぼることから、「読み」に対する学習動機は非常に強いといえよう。

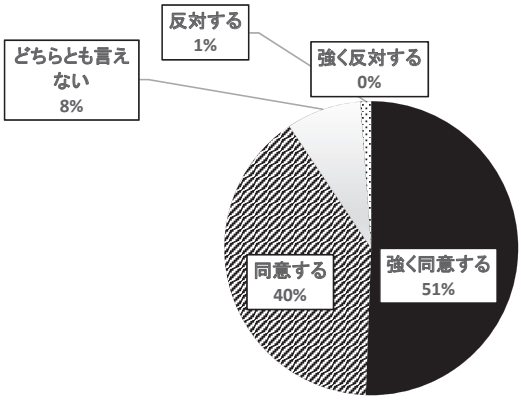

図２　日本の雑誌・新聞記事を読みたい

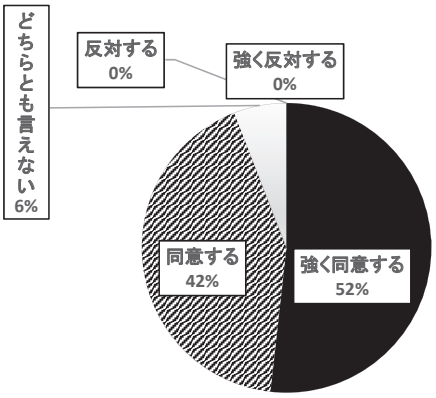

図３　日本語で書かれた文献を読みたい

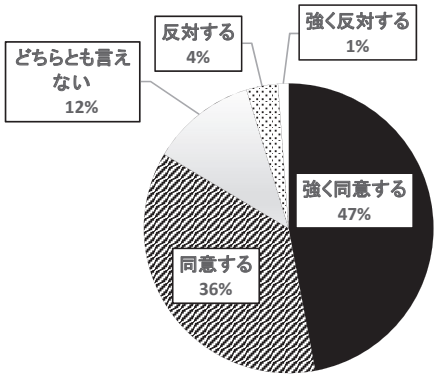

図４　メール・SNS を書きたい

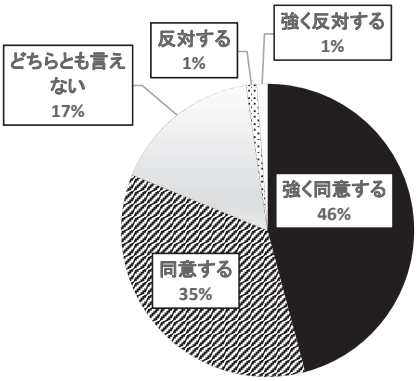

図５　日本語でレポート・論文を書きたい

次に日本語でのライティングに関する学習動機を見てみよう。図４の「メール・SNS を書きたいから」という学習動機においては、「強く同意する」･「同意する」を合わせると 83％にのぼる。専門科目において日本語のアカデミック・ライティングが要求されない CRPS 生にとって、日本語を書く能力の向上は学習ニーズとして低いのではないかという予測が成り立つと思われる。しかしながら、図５の結果はそうした予測を覆すものとなっている。「日本語でレポート・論文を書きたいから」日本語を学習すると答えた CRPS 生は 81％で、「どちらともいえない」が 17％、「反対する」･「強く反対する」がそれぞれ 1％との結果であった。このことから､「読み」に比べて若干割合は下がるものの、「書くこと」の学習動機もかなり高い傾向にあることがわかった。

また、これら４つの「読み書き」項目間で相関分析を行ったところ、「読む」ための学習動機である「新聞・雑誌を読みたい」と「日本語で書かれた文献を読みたい」との間には相関が認められた（r=.575, p<.01）。それに対して、「書く」ための学習動機、「メール・SNS を書きたい」と「日本語でレポート・論文を書きたい」との項目間では相関が有意とならなかった。表７は､その｢読み｣･「書き」の４項目間の相関を示している。表からわかることとして、第一に、「読み」に関する学習動機の２つの項目（番号１、２）は、いずれも「書き」の２項目（番号３、４）それぞれとの相関が認められることから、「読み」と「書き」の学習動機の間に関連があるといえる。第二に、「3. メール・SNS を書きたいから」は、「2. 日本語で書かれた文献を読みたいから」とは低い相関にあるが､｢1. 日本語の雑誌･新聞記事を読みたいから」とは「中程度の相関」でより強い相関となっている。また、「4. 日本語でレポート・論文を書きたいから」においては、「1. 日本の雑誌・新聞記事を読みたいから」より「2. 日本語で書かれた文献を読みたいから」の方が相関が強

表７　読み書きに関する項目の相関分析結果　（N=85、p<.01）

	1	2	3	4
1. 日本の雑誌・新聞記事を読みたいから	–			
2. 日本語で書かれた文献を読みたいから	.575**	–		
3. メール・SNS を書きたいから	.400**	.340**	–	
4. 日本語でレポート・論文を書きたいから	.362**	.591**	.206	–

表８「日本語を書く」ことと他の学習動機との相関分析結果　（r ＝相関係数、p<.01）

「メール /SNS」のみに相関が認められた項目	相関係数及び度合	キーワード
・日本文化を理解したいから ・日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから ・伝統的な日本の文化に興味があるから	r=.468（中） r=.363（低） r=.312（低）	日本文化理解及び関心
・日本人の友達とコミュニケーションできるようになりたいから ・アルバイトに役立つから	r=.405（中） r=.357（低）	日常生活（交流･アルバイト）
・JLPT に合格したいから	r=.376（低）	試験
・自国で日本語が人気があるから	r=.296（低）	自国の状況
「レポート / 論文」のみに相関が認められた項目		
・将来のキャリアに役立つから ・将来日本に住みたいから ・将来日本で働きたいから	r=.418（中） r=.331（低） r=.304（低）	将来のビジョン（キャリア・居住）
・日本語クラスを取るのが好きだから ・日本語学習は楽しいから ・日本語学習は趣味だから	r=.355（低） r=.354（低） r=.320（低）	日本語学習への興味・関心
・日本語学習により称賛を得たいから	r=.352（低）	他者からの評価
・日本の文学に興味があるから	r=.305（低）	文学への興味

い。つまり、相関の強さは、日常生活で必要とされる読み書きであるのか、それともアカデミックな読み書きなのかによって異なっているといえるだろう。

さらに、これらの読み書き項目と、他の 41 の学習動機との相関分析を行ったところ、「書き」項目の方で特徴的な傾向性が見られた。

「メール・SNS が書けるようになりたいから」との相関が見られたのは、日本文化に対する関心や日常生活における交流･生活に関する項目であることがわかる。「日常性」という点での繋がりが強いものと思われる。それに対して、「日本語でレポート・論文が書きたいから」については、将来のビジョン、日本語学習そのものへの関心としてまとめられる。つまり、「アカデミック・ライティング」という高度な日本語能力の向上は、日本語学習そのものに楽しみを見出す内発的動機、明確な将来のビジョン、日本文学という日本文化に関わるある一領域をより深く理解したいという学習動機に裏打ちされているものとして捉えることができるのではないだろうか。

5. 考察

分析の結果、CRPS 生の日本語学習動機の主な特徴として日本における人間関係構築を目的とした「交流志向」、映画･テレビ･雑誌等の娯楽･メディアを通した「日本文化理解志向」、日本語学習を将来的な就職に役立てようとする「キャリア志向」が、主な日本語学習動機として浮かび上がった。日本語母語話者とのコミュニケーション及び日本文化理解を上位の学習動機とする CRPS 生の傾向性は、先行研究（縫部他 1995 等）で指摘されている、日本での居住経験が統合的動機の強さに関連するという結果と結びつくものである。また「キャリア志向」に関わる日本語学習動機について、自国での就職に限らず、将来の日本での就労を希望するため日本語を学ぶと回答した割合が調査対象者の半数にのぼったことから、英語基準学生に対する日本語教育を通したキャリ

ア支援についても重視していく意義があるといえる。ディスコ（2017）が行った調査（回答企業数 611 社）によると、採用時にビジネス上級レベル以上を求める企業は、文系学生に対しては 55.1％で、入社後は 85.8％と大きく増える。また、労働政策研究・研修機構（2013）では、高度外国人材が仕事をする上で必要な日本語レベルとして、52.4％の企業が「報告書やビジネスレターなどの文書を日本語で作成できるレベル」を求めているとの調査結果が示されている。グローバル 30 プログラム（以下、G30）に関する報告では、G30 の留学生には日本企業への就職を希望する者が少なくないが、日本での就職に必要な日本語力を養成するには、このプログラムで必修とされる日本語授業の内容や時間数では十分とは言えない実状がうかがえることが指摘されている（初鹿野・徳弘 2013、ブッシュネル 2013）。以上のことから、将来的に日本での就職を見据えた英語基準学生のキャリア形成という視点は、日本語カリキュラムの作成及び改善においても考慮が必要な点の一つであると考えられよう。

また、本稿の調査対象者である CRPS 生の学習動機は全体的に高い傾向にあり、到達したい日本語習得レベルも初級・中級ではなく、上級・母語話者レベルを目標としている人の割合は非常に大きかった。さらに、日本語でのコミュニケーションに関わる学習動機だけでなく、日常的及びアカデミックな内容両面での読み書きに関する学習動機についても低くない傾向が見られた。英語で学位を取る CRPS 生のアカデミックな日本語の読み書きに対する学習動機を説明するための要因として、政策科学部における教育環境が影響を与えていることも考えられる。CRPS 生の中には 1 年次秋学期から 2 年次春学期にかけて、日本人学生と協働で学ぶプロジェクトベースの小集団演習科目を受講する学生が存在し[9]、グループでの研究プロジェクトを進めるプロセスにおいて、日本語で書かれた記事や文献の読み書きについての学習動機が強まる可能性もあると考えられる。また 1.2 で挙げた学部独自開講の日本語科目である Special Japanese Lecture の受講者は関心のある社会問題を日本語でまとめることが求められ、3 年次・4 年次の所属ゼミでの最終課題レポート・卒業論文の要旨を日本語で書く機会を持つこともある。こうした学習者が身を置く教育的文脈（Educational-Context）に関連した側面も学習動機を構成する要因の一つであるとされている（Shoaib and Dörnyei 2005）。英語基準学生を取り巻く学びの環境がそれぞれの日本語学習動機にいかに影響を与えるかという点をより詳細に見ていくためには、質的なインタビューの実施や異なる学びの環境を持つ他の英語基準学生の日本語学習動機との比較を行うことが有効であろう。

本稿の分析で示された CRPS 生の日本語学習動機の特徴から言えることは、英語で学位を取る英語基準学生の日本語到達目標が「日常生活を行うサバイバル日本語の習得」に限られる場合、学習者のニーズと異なる画一的な日本語コース運営に陥るおそれがあるということである。英語基準学生は、それぞれの学びの環境の中で、将来の選択と結び付けてより高いレベルの日本語習得を学習目標に見据えている可能性がある。英語基準学生の日本語カリキュラムを考えていく上では、そのような多様な日本語学習ニーズにも目を向けていくことが重要であるといえよう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、CRPS 専攻の英語基準学生を対象に実施した質問紙調査の結果に関する分析及び考察を行った。調査結果として、今回のデータからは、調査協力者が上級レベル以上の日本語能力の習得を目指す様相が確認されるとともに、「交流志向」、「日本文化･社会理解志向」、「キャリア志向」において高い学習動機を持っていることが示された。他方、卒業単位取得及び他者の勧め等、自身の学習意欲から離れた「義務的・誘発的動機づけ」は相対的に低い傾向にあることが明らかとなった。キャリアに関わる学習動機と他項目との相関分析では、「日本で就職したいから」という日本語学習動機は統合的動機づけとの相関が強いのに対し、「自国で日本語を使って就職したいから」という学習動機は他の道具的動機づけとの相関が顕著であった。また、「読み書き」能力の向上に関わる動機づけは相対的に高く、さらにアカデミックな読み書きに対する動機づけと、日常生活で必要とされる読み書きへの動機づけに分かれる傾向が見られた。

「留学生 30 万人計画」により、全ての専門科目を英語で受講し学位が取得できるいわゆる「英語コース」を増やして大学の国際化を進めると同時に、留学生が日本で就職することを推進しようとする国の政策には、留学生

の言語面（日本での業務遂行や人間関係構築などに必要な日本語の理解と産出）で解決すべき大きな課題がある（西原 2013）。本稿では、英語基準学生であるCRPS生が、アカデミックな内容を基盤とした日本語学習とキャリアに関わる日本語学習に対して、相対的に高い動機づけを持つ傾向を明らかにした。この結果は、上記の課題解決と英語基準学生を対象とした日本語プログラムのデザインに示唆を与えるものと考える。

本稿は、調査協力者がCRPS生85名に限られた探索的な分析であり、今後、同じ英語基準学生である国際関係学部のGlobal Studiesの学生のデータを合わせた量的分析を行うことで、さらに詳しく英語基準学生の日本語学習動機の構造を明らかにしていくことができると思われる。また、近年、動機づけ研究の流れの中における重要なアプローチの一つである質的分析を行っていくことで、より包括的に英語基準学生の日本語学習動機を捉えていくことができるであろう。

付記：本研究は、2016年度立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究助成プログラム及びJSPS科研費JP17K02876による研究成果の一部である。

【資料】日本語学習動機項目一覧（平均値、標準偏差）

1. 日本文化を理解したいから	4.35	0.735
2. 別言語を学びたいから	4.32	0.834
3. メール・SNSを書きたいから	4.25	0.885
4. 日本人の友達と日本語でコミュニケーションできるようになりたいから	4.69	0.512
5. 日本人と友達になりたいから	4.64	0.595
6. 日本語学習は楽しいから	4.25	0.830
7. 日本語学習は趣味だから	3.67	0.968
8. 日本語学習は努力する価値があるから	4.38	0.672
9. 日本語を学びたくはないが重要だとわかるから	3.36	1.299
10. 日本語が好きだから	4.22	0.713
11. 日本語を知っていることで他者から尊敬され得るから	3.87	0.979
12. 日本のゲームをするのが好きだから	2.93	1.518
13. 日本語学習により称賛を得たいから	3.88	1.005
14. 卒業するために履修しなければいけないから	3.49	1.259
15. 日本語で書かれた文献を読みたいから	4.46	0.609
16. 日本語でレポート・論文を書きたいから	4.24	0.854
17. 日本の文学に興味があるから	3.84	0.974
18. 日本語クラスを取るのが好きだから	4.09	0.908
19. 日本の雑誌・新聞記事を読みたいから	4.40	0.694
20. 将来も日本で勉強を続けたいから	4.09	0.868
21. 将来日本に住みたいから	3.68	1.026
22. 将来日本で働きたいから	3.79	0.983
23. 将来自国で日本語を使って働きたいから	4.12	0.892
24. 日本語科目でいい成績が取りたいから	4.49	0.648
25. 日本語学習は日本での旅行に役立つから	4.69	0.535
26. 将来のキャリアに役立つから	4.55	0.732
27. 日本語の映画やテレビ番組を理解できるようになりたいから	4.45	0.838
28. 日本語の歌を聴いたり、歌ったりして楽しみたいから	4.02	1.046
29. 日本語は勉強し始めるのに易しい言語だから	3.28	1.130
30. 中学や高校で日本語を勉強したから	2.08	1.391
31. 特に目的はないが、大学の科目にあったから	2.32	1.153
32. 両親が学習をすすめたから	3.55	1.129
33. 日本語は自分の視野を広げるのに重要だから	4.28	0.666
34. 新しい人に会って友達になりたいから	4.44	0.663
35. JLPTに合格したいから	4.39	0.818
36. アニメや漫画に興味があるから	3.78	1.257
37. 日本人の行動様式に興味があるから	3.80	0.986
38. 日本人のライフスタイルと習慣に興味があるから	4.01	0.852
39. 日本の歴史に興味があるから	3.55	1.075
40. 自国で日本語が人気があるから	3.49	1.119
41. アルバイトに役立つから	4.50	0.685
42. 起業して日本と貿易したいから	3.14	1.274
43. 伝統的な日本の文化に興味があるから	4.01	0.809
44. 外国語を学ぶのが好きだから	4.24	0.826
45. 漢字の理解を深めたいから	3.95	1.045

注

[1] 文化庁ホームページ「平成 29 年度国内の日本語教育の概要」http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h29/pdf/r1396874_01.pdf 2018 年 8 月 5 日検索）より。大学等機関（大学・短期大学・高等専門学校）で学ぶ日本語学習者の数である。10 年前の学習者数（41,129 名）より 29.6%増加している。

[2] 英語により政策科学（現代社会で生じる問題の原因を明らかにし、解決策を提示する「問題解決型」の学問）を学ぶ専攻で、2013 年の開設以降、2018 年秋学期に第 6 期生を迎え 101 名が在籍している。

[3] 全ての専門科目を英語で受講し学位が取得できる留学生を指す。

[4] 必修 12 単位に日本語以外の外国語科目の受講単位を含めることも可能である。

[5] 表 1 において、＊のない科目は日本語教育センターにより提供されている。＊の学部独自科目は政策科学を日本語で学ぶ contents base の科目である。

[6] 初級レベルは、平仮名から日本語学習を始める初級前半クラスである「初級 1」、初級後半の「初級 2」に分かれるが、1 期生～ 5 期生 98 名のうち、入学時に「初級 1」を受講した学生は、55 名（56.1%）であった。入学年度別に見ると、2013 年度入学の 1 期生は 33.3%、2 期生：58.3％、3 期生：59%、4 期生 53.8%、5 期生：65.4%となっている。

[7] 1 期生から 5 期生 98 名の中で、2018 年 10 月現在、12 単位を超えて尚日本語科目を履修している（した）学生は 55 名（56.1%）にのぼる。

[8] 調査における 5 段階尺度に基づき、1 点～ 5 点までの得点化を行い、4 点～ 5 点を示したものを上位項目とした。

[9] 小集団演習科目である「政策実践研究プロジェクトフォロワー」の特別プロジェクトの CRPS 生受講者数（3 期生より履修が開始された）は、3 期生：5 名（22.7%）、4 期生 15 名（57.7%）、5 期生：8 名（30.8%）である。

参考文献

大西由美(2010)「ウクライナにおける大学生の日本語学習動機」『日本語教育』147 号　82-96 日本語教育学会

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』110 号 130-139 日本語教育学会

小林明子（2008）「日本語学習者のコミュニケーション意欲と学習動機の関連」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部　第 57 号　245-253

高岸雅子（2000）「留学経験が日本語学習動機におよぼす影響：米国人短期留学生の場合」『日本語教育』105 号　101-110 日本語教育学会

高橋雅子・平山紫帆（2014）「留学生の日本語学習動機の研究に関する現状と課題：日本語教育における文献調査より」『立教大学ランゲージセンター紀要』31 号　95-102

ディスコ（2017）「外国人留学生／高度外国人材の採用に関する企業調査（2017 年 12 月調査）」https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2017/12/2017kigyou-gaikoku-report.pdf（2018 年 10 月 29 日検索）

寅丸真澄・江森悦子・佐藤正則・重信三和子・松本明香・家根橋伸子(2018)「留学生のキャリア意識とキャリア支援の『ずれ』を考える：日本語学校・短大・大学（首都圏・ 地方）の留学生の語りから」『言語文化教育研究学会 第 4 回年次大会予稿集』200-211

西原鈴子（2013）「大学の国際化と日本語教育」『シリーズ 新しい日本語教育を考える』1, 15-41　立教大学日本語教育センター

縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査：ニュージーランドの場合」『日本語教育』86 号　162-172　日本語教育学会

初鹿野阿れ･徳弘康代(2013)「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業 G30 国際プログラム（学部）における日本語科目 2012 年度報告」『名古屋大学留学生センター紀要』11 号 72-73

廣森友人（2002）「第二言語／外国語教育における言語学習動機づけ研究：動機づけ研究の新しい枠組みへ」『Hokkaido JACET Journal』1 号 19-31

福岡昌子（2015）「留学生の就職に関する意識調査とビジネス日本語教育への示唆」『三重大学国際交流センター紀要』10 号　1-18

ブッシュネル・ケード（2013）「グローバル 30 プログラムにおける学生の日本語学習ニーズに関するアンケート調査報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28 号 393-408

堀井恵子（2010）「プロジェクト型ビジネス日本語教育の意義と課題」『武蔵野大学文学部紀要』11 号 96-86

守谷智美（2002）「第二言語教育における動機づけの研究動向：第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」『言

語文化と日本語教育』増刊特集号 315-329
文部科学省（2018）「資料 4 ポスト留学生 30 万人計画を見据えた留学生政策」将来構想部会（第 9 期～）（第 19 回）配付資料 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/1405510.htm（2018 年 9 月 26 日検索）
八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』関西大学出版部
大和隆介・三上由香（2012）「日本人英語学習者の動機づけに関する調査と考察：L2 動機づけ自己システムの観点から」『京都産業大学教職研究紀要』7 号 1-21
楊孟勲（2011）「台湾における日本語学習者の動機づけと継続ストラテジー：日本語主専攻・非専攻学習者の比較」『日本語教育』150 号　116-130　日本語教育学会
羅暁勤（2005）「学習者のモチベーションを研究する」西口光一（編）『文化と歴史の中の学習と学習者：日本語教育における社会文化的パースペクティブ』189-211　凡人社
労働政策研究・研修機構（2013）「企業における高度外国人材の受け入れと活用に関する調査」https://www.jil.go.jp/institute/research/2013/documents/0110.pdf（2018 年 10 月 30 日検索）
Apple, M.T., Silva, D.D., & Fellner, T.（2013）. *Language learning motivation in Japan*. Multilingual Matter.
Deci, E. L., & Ryan, R. M.（1985）. *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
Dörnyei, Z.（2005）. *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
Dörnyei, Z.（2009）. The L2 motivational self system. In Dörnyei, Z. and Ushioda, E.（eds）, *Motivation, language identity and the L2 self*. 9-42. Bristol: Multilingual Matters.
Dörnyei, Z., & Ushioda, E.（2001）. *Teaching and Researching Motivation*. 2nd edition. Harlow Pearson.
Gardner, R.C.（1985）. *Social psychology and second language learning*. London: Edward Arnold.
Gardner, R.C.（2010）. *Motivation and second language acquisition*: New York: Peter Lang Pablishing.
Gardner, R.C., & Lambert, W.E.（1959）. Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.
Gardner. R. C., & Lambert, W. E.（1972）. *Attitudes and motivation in second language learning,* Rowley, MA: Newbury House.
Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2000a）. Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist,* 55, 68-78.
Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2000b）. Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology,* 25, 54-67.
Shoaib, A., & Dörnyei. Z.（2005）. Affect in life-long learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. In P. Benson & D. Nunan（Eds.）, *Learners' stories: Difference and diversity in language learning*. 22-41. Cambridge: Cambridge University Press.
Ushioda, E.（1998）. Effective motivational thinking: A cognitive theoretical approach to the study of language learning motivation. In: Alcón Soler, E., and Codina Espurz, V.（eds.）*Current issues in English language methodology*. Castelló de la Plana, Spain: Publicacions de la Universitat Jaume I, 77-89.